社会を映す鏡としてのことば

人文科学研究科長　森　澤　万里子

日本において年末に注目を集める「『現代用語の基礎知識』選　ユーキャン新語・流行語大賞」とはいささか趣が異なるが、ドイツでも12月に入るとその一年を象徴することばが選ばれ、上位10語が発表される。審査を行っているのは、ヴィースバーデンの「公益法人 ドイツ語協会（Gesellschaft für deutsche Sprache e.V.）」で、2021年に第一位を獲得したのは「防波堤 （Wellenbrecher）」だった。同協会の WEB サイト（https://gfds.de/wort-des-jahres-2021/：最終アクセス2022年１月14日） によると、この語は、ドイツにおける新型コロナウイルス感染症第４波の折に講じられた（感染予防）措置全般を指すことばである。しかし、この語は「防波堤になってください！（Werden Sie zum Wellenbrecher!）」という表現でも使用され、その意味するところは、「感染予防措置に従うことによって、あなた自身が防波堤の役割を果たしてください」ということだと解釈される。

以上は、既存の単語が社会的な脈絡の中で比喩的に使用され、独特のニュアンスを獲得した例である。一つの語が社会状況を如実に反映していると言うことが可能だが、社会もしくは社会変化を映し出す力を持つのは「防波堤」のような名詞だけではない。関係代名詞のような機能詞の用法が社会変化を反映していると考えられる例もある。次にその一例を歴史社会言語学に関する拙論（Syntaktische Erscheinungen als Spiegel der Gesellschaft im 16. Jahrhundert. In: Neue Beiträge zur Germanistik. 2004, Bd. 3/Heft 1, München 2004, 183-195）の一部を引用しながら紹介したい。

同論文は、16世紀のニュルンベルク市民によって作成された文書を手がかりに、16世紀における言語変化と社会変化の関係について論じたものである。

歴史社会言語学的な意味で16世紀のニュルンベルク市が持つ最大の利点の一つは、「官庁の公文書」や「一般市民男性（商人や学生）の私的文書（書簡等）」に加え、「一般市民女性（商人の妻や娘）の私的文書（書簡）」の原本が今でも保存されている点である。そこで、拙論では、この三つのテキストグループに関し、それぞれに現れる関係詞の分布を16世紀前半と後半に分けて調査した。

16世紀のドイツ語で使用される主な関係詞は der, so, welcher の三つであり、英語の that や who/which のように、構文上は大差なく用いられるが、それぞれの持つ文体的特性が異なる。古い時代から存在する der はいわば「基本形」であり、14世紀頃から特に官庁で使用された so は「官庁体」、so より少し遅れて使用が始まった welcher は「教養語的」という性質を持つ。

この三つの関係詞の分布を見ると、16世紀前半では、「官庁の公文書」同様、「男性の私的文書」にも der, so, welcher の全てが現れるが、「女性の私的文書」では der の使用しか確認できなかった。しかし、16世紀後半になると、「女性」にも so と welcher が見られるようになる。

16世紀後半のニュルンベルク市において、「女性」の言語使用が「男性」のそれに近づくことは、語順の変化について分析を行ったロバート・ピーター・エバート（Robert Peter Ebert）によって指摘されており、拙論は語順以外の言語現象に関しても、同等の結果が得られるかを検証した形をとっている。

エバートは、言語使用において男女差が縮小された要因の一つを、16世紀の社会的大事件である宗教改革との関連で行われた教育改革、殊に、女子に対する教育機会の改善に見ている。

本稿の前半で述べた、「防波堤」のような名詞による反映の方法とは異なるが、関係詞のような機能詞の使用も、それを用いる個々人の人間性を超えて、社会変化との関連で捉えられる点にも、ことばの不思議とその奥深さを感じとることができる。